

2-2

○氏の生活レベル向上についての取り組み

利用者の可能性を信じてのコミュニケーションの工夫

コミュニケーション

社会福祉法人 聖風会 特別養護老人ホーム「足立新生苑」

ユニットリーダー：宮澤 まどか

共同研究者：ユニットメンバー他4名

東京都足立区花畑4-39-10

TEL：03(3883)7946

E-mail：sinseien@seifuukai.or.jp

FAX：03(3880)0950

URL：<http://www.seifuukai.or.jp>

【施設・事業所の概要】

併設：在宅サービスセンター・地域包括サービスセンター・ケアマネージメントセンター

入所定員：220名 ショートステイ：16名

〈取り組んだ課題〉

- 骨折後の回復レベルに応じた身体介護
- 恐怖心が強い氏へのコミュニケーション方法。
目線を合わせることの大切さ。

〈具体的な取り組み〉

骨折（右大腿部頸部）前後の身体介護の変化

[排泄]（骨折前） 独歩・トイレ誘導
（骨折・退院後）ベッド上オムツ（職員2人介助）
（新たな対応） 手引き歩行（職員1人介助）

[入浴]（骨折前） 一般浴
（骨折・退院後）ストレッチャー浴（職員2人介助）
（新たな対応） 昇降機浴（職員1人介助）

[移動]（骨折前） 独歩
（骨折・退院後）車椅子（介助）
（新たな対応） 手引き歩行

コミュニケーション方法

- 目線を合わせる
（例：ベッド上排泄介助…上から職員が目線→
恐怖・暴れる）
- 手引き歩行→氏のペースで。
- 拒否があるとき、ゆっくり説明する。
- スキンシップ（手を握る）
- 笑顔で対応

〈活動の成果と評価〉

- 職員を攻撃することが減る
（手を上げる・つばを吐く・暴れる）
- 誰かと一緒にいることで安心感が生まれ、笑顔が増える。
- 身体機能の向上（起床時、自ら起きようとする）
- 職員の言葉が理解できる。
- 介助に対して構えない。
- 他人に対して興味を持ち、声掛けを自ら行う。
- 職員側の意識変化「拒否があるから介助は怖い」
→「ゆっくり話せば理解して下さる方」

〈今後の課題〉

- 分かりやすい声掛け（単語など）を心掛け、
自発的な発語を多くする。
- ユニットのみならず、フロア職員の対応の統一
- 手引き歩行距離の拡大。

〈参考資料など〉

- ケース記録